

平成 29 年度第 1 回「千歳市子ども・子育て会議」会議録

日 時	平成 29 年 6 月 22 日（木）10 時～12 時 10 分	
会 場	千歳市民文化センター（北ガス文化ホール）3 階 中会議室 2	
出 席 者	（委 員）※50 音順	（市・事務局）
	委 員 青砥 三枝子	こども福祉部長 上野 美晴
	委 員 吾田 富士子	こども福祉部次長 千田 義彦
	委 員 石岡 くに子	こども政策課長 北村 昌樹
	委 員 上田 純恵	こども政策係長 高松 康太
	委 員 大関 恵子	こども政策係主任 石井 彰子
	委 員 河岸 由里子	こども政策係主任 村井 友紀子
	委 員 倉田 真智子	（市・関係部署）
	委 員 児玉 美津子	こども家庭課長 磯部 由起子
	委 員 三溝 昌宏	子育て総合支援センター長
	委 員 谷掛 亜紀	石田 英子
	委 員 辻 裕子	こども療育課長 佐々木 幸廣
	委 員 伝庄 彩子	教育委員会企画総務課
	委 員 西 博康	総務係長 田中 稔大
	委 員 松浦 まゆみ	保育係長 金井 貴史
	委 員 三浦 朋美	保育係主任 谷口 正樹
	委 員 森本 麻美	保育係主事 山本 融
	事 務 局	こども福祉部こども政策課
会議の公開	公開	
傍 聴 者 数	1 人（報道関係者）	

1 開会

（こども福祉部長あいさつ）本日はお忙しい中、会議に御出席いただきありがとうございます。また、日ごろから会長を始め委員の皆様には本市の子育て施策の推進に御支援をいただいていることに心から感謝を申し上げます。

今年度、市の機構改革の一つとしまして、子育て支援の充実と体制強化を図る目的で、保健福祉部の子育て支援室が昇格し、こども福祉部としてスタートいたしました。部の名前のおり、子どもたちが幸せや豊かさを実感できるよう、また、子育て世代の皆様には、千歳市で子どもを産み育てたいと思っていただけるように、“子育てするなら、千歳市”の推進に取り組んでまいりますので、委員の皆様におかれましては、引き続きお力添えをいただきたいと思います。

千歳市は人口が増え続けている北海道内でも数少ないまちの一つです。人口に占め

る女性の割合も年々増加しているほか、女性の就業率も年々増加しております。この中には乳幼児の子どもを持つ共働き世帯も多くなっており、子どもを育てながら仕事をしたいという母親が多くなっています。こども福祉部としてはそのような家庭を支援し、また、保育の受け皿を確保することが喫緊の課題となっておりまいました。本日は、保育の受け皿の量の見直しと、保育料の負担軽減をメインにご説明させていただきますので、委員の皆様には忌憚なく御意見をいただければありがたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2 議事等

委員数 16 人中 15 人の出席につき、会議が定足数（委員の半数以上の出席）を満たしていることを確認。

会長により議事進行。

(会長あいさつ) 皆さま、今日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。新たにこども福祉部ができ、初の女性部長が就任なさって本当に嬉しく思っています。福祉と言いますと、人々の幸せな暮らしを整えていく仕事となりますが、それに“こども”という言葉が付いています。子どもたちの成長に寄与していくのが教育だと思っています。こども福祉部の活動と、千歳市子ども・子育て会議の中で、福祉とともに教育の側面を心のどこかにおいて、子ども達がこの千歳の中で育ち、自己実現していくような環境を作っていくことが私たちの役目と思っています。今まで長く子育て支援行政に携わってくださった方達も異動になられて、新しくメンバーが入ってきていますが、子ども・子育て会議も礎を作った時期が終わって、5 か年計画の中間の見直しの時点です。より良い政策を行っていくその第一は、皆さん市民の意見が活発に出されて、その意見がちゃんと実現されていくことだと思っています。みなさんは市民の代表ですから、ぜひ皆さんの大事な声を聞かせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

議事等（1）「千歳市子ども・子育て支援事業計画における教育・保育に関する『確保方策』の中間見直しについて」

こども政策課長から「資料1」により説明。

(会長) 御意見御質問が特にございませんでしたので、事務局の提案どおり決定として進めたいと思います。

議事等（2）「平成 29 年度保育料の負担軽減について」

保育係長から「資料2」により説明。

(A委員) 資料2の6ページで、住民税非課税世帯の保育料が掲載されていますが、この部分が0円になるということですか。

(保育係長) お見込みのとおりです。

(A委員) この負担軽減についての各施設への説明は予定されていますか。

(保育係長) 本日この会議で承認いただければ、施設への説明についても検討してまいります。

(B委員) 対象となる世帯数は全体の何割ぐらいを想定していますか。

(保育係長) 全体に対する割合は集約していませんが、今回非課税世帯として対象となるのは、1号認定32世帯、2号認定11世帯、3号認定9世帯、合計52世帯です。

(会長) それほど多くはないということですね。

他になければ承認ということで次に進めさせていただきます。

議事等 (3) 「『千歳市子育てママ応援会議』について」

こども政策係長から「資料3」により説明。

(C委員) この会議ではどのような話し合いをなさる予定でしょうか。

(こども政策係長) 会議内容は今の段階では未定ですが、国は仕事と家庭の両立支援を通じて女性の就業率向上をめざしており、千歳市としても官民一体となって女性をとりまくさまざまな社会環境を女性の視点で改めて検討し、支援していこうという考えです。

(D委員) 「ちとせ子育て支援ネットワーク会議」では、この「子育てママ応援会議」と同じように子育て中のママや民生委員児童委員がメンバーとなっていて、重複する部分があるかと思います。一つの会議とした方が、たくさんの方が参加できるのではないのでしょうか。

また、子育て支援ネットワーク会議では、「会議」という名称は固すぎるということで、今年から名称を改めた経過があります。このことについては、どのようにお考えでしょうか。

(こども福祉部長) ちとせ子育て支援ネットワーク会議の活動につきましても、子育て施策の参考にしたり、千歳市子ども・子育て支援事業計画の参考とすべき内容については吸い上げたりしたいと思っています。

こちらの子育てママ応援会議は、当事者の声を聞くことに重きを置いた会議です。構成はまだ案の状態ですが、実際に企業に勤めながら子育てをしている方や、これから結婚して子ども持ちながら仕事をする方、地域の中で子育て世代をより身近で見守っていただいている方々、また、女性だけではなく男性も含めた当事者にお集まりいただきたい考えです。「千歳市の女性は独身者の就業率が高いですが、結婚や出産を機に退職する方が多いのはなぜか。」、「どうしたら、全国全道並み

に女性の就業率が高くなるか。」など、当事者の生の声を聞きながら課題を検討し、現実に踏み込んだ会議としていきたいと考えています。また、働いている方も多いため、会議の日程や時間も限られてくるかと思います。ちとせ子育て支援ネットワーク会議と両輪として御協力いただき、抽出されたものは千歳市子ども・子育て会議に報告し、具現化し、次期千歳市子ども・子育て支援事業計画に盛り込んでいく考えです。

(会長) 議決する機関ではないので、「会議」という名称はいかがなものでしょうか。

「子育てママ応援会議」という名称だと、独身の方は、自分は関係ないと思ってしまうかもしれません。

(こども福祉部次長) 行政としては、即効性をもって実現させていきたいと考えています。企業に勤めている方に会議に参加していただくのは難しいので、業務の一環として会議に参加することを雇用主にご理解いただきやすいよう、こういった名前で提案させていただきました。

(E委員) 子どもが小学生以上でも、興味があれば会議のメンバーに選ばれるのでしょうか。

(こども政策係長) 会議構成は未定ですが、幅広く募りたい考えです。

(F委員) この会議にはいろんな方に参加してほしいです。千歳の場合は、病気になったときに頼れるところが限られており、両親が体調を崩してしまったときに受け皿が無い状況です。また、御主人の転勤に合わせて、仕事を辞めて千歳に転入してきた女性が多いですが、その中には子どもの保育先がないため働きたくても働けないという方もいます。保育所だけではなく子育てを援助してくれる温かいところがないと働くのは難しいので、子育てママ応援会議は、構成員にサポート機関の関係者を含め、子育て家庭を取り巻く環境について幅広く考える必要があると思います。また、学生にも千歳で子どもを産んで子育てすると良いと実感してもらえると良いと思います。

(会長) 会議の開催時間は夜と昼のどちらでしょうか。学生や独身者と、仕事や子育てを抱えている方とで分けて開催する方法もあるかと思います。また、子どもがいる方は預ける場所が必要になるかと思います。いろんなことをいろんな立場で語り合える場として、生の声をどう吸い取って、どう発展させていくか、千歳市子ども・子育て会議としては見守り、実際に会議を行いながら見直しを行っていくことになるかと思います。

(G委員) ファミリー・サポート・センターの料金負担が、利用する保護者にとって重いと感じています。

また、子どもが幼稚園や小学校の長期休暇のときに、児童館のランドセル来館のようなものが頼めたら働きやすいかと思います。

(こども福祉部長) 子育てのための社会資源があるということも、この会議の中でお示

ししていきたいと思っています。

子どもの長期休暇中の預け先についての要望が多いということも聞いておりました。今年度からモデル事業として、小学校の夏・冬・秋休みに、定員に余裕のある学童クラブを利用できる事業を開始し、児童を募集しているところです。このモデル事業は千歳小学校と向陽台地区の2か所、合わせて3か所のみなので、自分で通えない子どもは親の送迎が可能な方のみ受入となりますが、市内の全小学校の児童にお便りを配布予定です。

(D委員) 定員は何名ですか。

(こども福祉部長) 各施設15人として、3施設で実施します。

(会長) 一般の方たちはまだ知らないのですね。

(こども福祉部長) 市のホームページと広報ちとせにこれから掲載します。

(会長) 若い人たちはホームページを見ないでスマートフォンのアプリを使うそうなので、子育てアプリみたいなものがある、「今、検討中です」というような情報があると、平成生まれの方には良いのかと思います。

(H委員) 千歳市の子どもの数からすると、病児保育の枠が少ないのではないのでしょうか。病児保育事業を実施しているというだけでなく、定員や場所を増やす予定はありませんか。

(こども福祉部長) 病児保育は市民病院に併設した「千歳こどもデイケアルーム」で実施していますが、現在のところ増やす検討はしていません。ニーズの高さは承知していますので、今後、次期千歳市子ども・子育て支援事業計画の策定に向けて検討していきたいと思っています。

一方で、両立支援をする事業者の理解も浸透していると感じています。行政としてもニーズ調査をしたうえで、今後検討していきたいと考えております。

(子育て総合支援センター長) シルバー人材センターでは今年度に入ってから保育士の方が会員登録をされ、ファミサポとは重複しない子育て支援を検討しているそうです。例えば、母親が手を怪我した家庭に行って子育てを支援しながら家事を手伝うなどの取組みを始めたと聞いています。

(会長) これで議題3については承認とさせていただきます。

議事等 (4) 「その他」

こども政策係長から「資料4」により説明。

(会長) 定員はどのくらいを想定していますか。

(こども政策係長) 6人以上30人以下として公募しています。

(会長) 他になければ、承認とします。

こども家庭課長から「資料5」により説明。

(C委員) 現在市内で運営されているこども食堂では、どれくらい利用者がいますか。

(こども家庭課長) 多いときは30名ほど利用があるそうです。

(会長) 一般的に、採算はとれるものなのでしょうか。

(こども福祉部長) 料金は、無料や100円など、自由に設定可能です。

(会長) 当然赤字が出ると思いますが、どのように運営しているのでしょうか。

(こども福祉部長) 一般的には企業からの寄付金や食材の提供など、地域のネットワークを使って運営していると聞いています。

(D委員) 市として、こども福祉部として、どのように関わっていくつもりですか。

(こども福祉部長) 自治体としても子どもの居場所づくりや孤食の問題に対する支援はもちろんしていますが、地域の子どもは地域の大人たちで見守り、育てるという考えから、子ども食堂の取組みが全国で広がってきているように思います。以前より、市民の方からこども食堂をやってみたいという相談を受けるようになり、市としても取組みを支援していきたいと考え、行政として適切な関わり方を模索しています。まずはフォーラムを開催して市民の方の考えや思いを探り、ある程度絞り込むことができましたので、今後市としての取組みを検討し、具体化していきたいと考えています。

(会長) こども食堂について必要とされる支援を検討し、歩み始めるということですね。一般市民が始めることに対して市がどこまで踏み込むか、バランスが難しいと思います。場所などを全て市がお膳立てしてというのも違いますし、継続できるか不安があり一歩踏み出す勇気が出ないということも考えられます。札幌では、子ども食堂で学生ボランティアが勉強を教えるといった取組みも出てきています。

(会長) それでは最後に、本日の会議をふまえた思いなどお話ししていただければと思います。

(H委員) 昔よりも子育てに対する行政の関わりが増え、心強く感じている保護者もいると思います。私は情報を知らせることが大切だと思っており、新たに始まった事業がその後どうなったのか気になっているところもありましたので、今回病児保育などについて聞くことができ参考になりました。

(B委員) 千歳市ではいろいろな事業を先取りして実施してきましたが、低所得者層への支援など、これからますます新しいことをやっていくということで、楽しみにしています。家庭にはいろいろな背景があり、生活困難な家庭にも寄り添っていくことを市が率先していると心強いです。期待しています。

(I委員) こども食堂フォーラムの参加者は50~60代が多かったということで、こども食堂を利用する子どもを持つ年代以外からの関心の高さを感じました。アンケート

ト結果の中で、「(こども食堂が) 早々に必要なくなるのが望ましい」という意見がありました。その通りだと思います。今の子どもたちが育っていく世の中が、より良いものとなることを望みます。

(F 委員) 千歳市は転勤者が多く、転入してから求職する方が多くいます。保育施設や緊急サポートネットワークなどいろいろな子育て支援がある中で、一番身近で変わっていかねばいけないのは父親だと思っています。子育て支援センターを気軽に利用できる父親も増えてきています。2月に市内で行われたネウボラフォーラムの講演で、「(育児をする父親を当たり前のものにして) イクメンという言葉がなくしたい」という話がありました。父親自身が楽しむことをしていったら、母親も笑顔になるのではないかと思います。

(J 委員) 子どもの発達障がいについて、母親が理解していても父親がなかなか理解せず、支援につながらないことがあります。

こども食堂の話題がありましたが、昨年、北陽高校の有志の先生たちが子どもの居場所づくりの取り組みを行いました。小さい子どもだけでなく、中高生にも居場所が必要で、特に高校生が学校を辞めてしまうと居場所がありません。大学の中退者も同様で、このような活動で引きこもり対策にも寄与できると考えています。

(G 委員) こども食堂をやりたいという人が周りにいるのですが、続けられるか不安で協力しづらいです。すでに千歳で始めて止められた方がいるかと思うので、情報をいただけたらと思います。

(K 委員) M字曲線の話がありましたが、保育士の雇用に当たって、千歳は世帯収入が高い家庭が多いためか、なかなか常勤で働いてもらえません。自分の子どもが長期休暇中にはお昼に仕事から帰って子どもに昼食を食べさせたいという気持ちもよくわかります。ランドセル来館を他の地域でもしていただけたら、子どもを持つ保育士が働きやすくなり、もっとたくさんのお子さんを保育園でお預かりできるのではと思います。

(A 委員) 保育所等の施設の整備と併せて、保育教諭の確保も同時進行で進めなければなりません。事業所での募集では限界がきています。市やハローワークでも説明会等を開いていただけていますが、保育士等の宿舍の借上げ支援や、保育士人材就職支援事業、保育補助者の雇用強化事業などを行い、保育人材確保を推進することが必要ではないでしょうか。また、技能経験による追加的な処遇改善も始まりましたので、研修制度を活用して積極的に市から情報提供をすることで、より経験年数、技能向上に役立つのではと考えております。

また、保育教諭が不足する要因の一つとして、発達障がいの子どもの数が増えています。各施設には認定を受けている子以外にも多くの気になる子が存在しますが、現状では年に一度しか障がい児認定が受けられません。これを年数回にすることはできないでしょうか。また、気になることがあった場合、実際にみてもらえないか。

みてもらうために各判断ではなく、チェックリスト等を作成し共通認識をもつことが必要ではないでしょうか。

(E委員) 千歳市に引っ越してきて2年たち、「子育てするなら、千歳市」のキャッチフレーズのとおりだと日々実感しています。こども食堂に興味があり、できることからしていきたいと思います。

(D委員) 民生委員児童委員は、0歳から18歳までの子ども達を対象にお手伝いをしており、4か月健診でチラシを配ったり、各地域で子育てサロンを行ったりしています。サロンではこの頃、発達のゆっくりなお子さんが多く、お母さん達が心配しているのを感じています。

(L委員) 子育てママ応援会議で一般の意見を聞くのであれば、子育て支援ネットワーク会議のような形式にした方が良いと思います。

また、女性の就業率に関して、子どもが体調を崩した時に迎えに行かなければならないリスクがあるので働きづらい部分があると思います。企業が求人をする段階で、そういった場合の対応について提示があると良いと思います。

(M委員) 事業所内保育所を運営する者として、職員の確保の問題と、職員が働きやすい環境を整備するため事業所内保育所を整備するという、両方の立場に立っており、育休産休明けの職員が戻ってきやすい職場作りを一番に考えています。

発達の面で悩む部分も多くあり、職員同士だからこそ言いつらいということも企業として抱えております。市での研修が保育士の資質向上に繋がると思っていますので、よろしくをお願いします。

(N委員) 市外に転出した方から、千歳が過ごしやすかったという話を聞くことがあり、千歳市はすごいと感じています。

一方で、千歳市では、周りにサポートしてくれる祖父母などがいなくて困っている家庭が多いと思うので、シルバー人材センターで始まったという取組みが広がると嬉しいです。

(O委員) 企業としても、小さな子どものいる女性職員は日中のみの勤務としたり、子どもの行事には休みを取れるようにして、子どもが大きくなったら協力してもらおうつもりで、長く勤めてもらっています。企業も努力しているので、行政と連携していけたらと思います。

(C委員) 昨年からの会議では未就学児の話が多く、小中学生の話がでてきていないので、考えてもらいたいと思います。児童数の多い小学校と、少ない小学校の差が大きく、それぞれにメリット・デメリットがあるので、そのことについて考えてもらえたらと思います。

(会長) みなさんの意見を聞きますと、いろいろな広がりがあつて、これからのこども福祉部の進むべき方向がみえてきます。保育士不足の問題には共に悩んでいます。保育の現場には保育士の待遇とともに、働き方の問題もあります。

スウェーデンでは、1960年代に女性が働かなければ国が立ち行かなくなり、様々な分野の学者が子どもにとって保育は是か非かということを検討しました。その結果、子どもにとって幼いときから良質な保育があるのは良いことだと結論付け、そのうえで保育を全て無料としました。女性が働くということは、母親にとっても職場でのつながりができ、子どもにとっても絆が確保できることとなります。大局的な視点で子どもや生きがいについて見極めていかなければなりません。

今世界中で読まれている「子どもの経済学」という本で、発達が著しい幼児期に「自分は守られている」と感じられた子どもは30～40代になったときの幸福感が高いといわれています。知能を育てる前の非認知の力が生涯に力を与えていくといわれています。OECDは国を守るため子どもにお金を投資し始めており、今は日本が最低です。国は5歳児の保育の無償化や、保育士の確保などを掲げていますが、消費税増税延期など、財源の問題を抱えています。

最後に、動物の中には子どもを産んですぐに死に絶えるものもありますが、人間は子どもを産んだ後も長く生き、みんなで育ててきた生き物です。次の世代のことを考えられる人類であるということを考えながら今日過ごさせていただきました。(こども福祉部次長) それでは、これもちまして、平成29年度第1回子ども・子育て会議を閉会いたします。本日は、ありがとうございました。

3 閉会